

研究発表もうしこみフォーム

氏名：呉人 花

氏名のローマ字表記：Kurebito Hana

所属：京都大学 人間・環境学研究科 博士後期課程

専門分野：文化人類学

発表のタイトル：

内モンゴルにおける乳・肉利用の現在：ウシ飼養に「専門化」した牧民に着目して

発表要旨（721字）：

本発表の目的は、内モンゴル自治区シリングル盟正藍旗のウシ飼養に「専門化」した牧民に着目し、乳・肉利用にみられる変化と連続性について、生業と産業の狭間で展開される牧畜の特徴をふまえて明らかにすることである。

産業としての畜産では、生産効率という経済的価値が最優先され、土地利用、乳・肉生産のいずれにおいても集約的に営まれる点が特徴的である。調査地の状況と照らし合わせるならば、「専門化」と「肉牛生産」という2点から産業としての様相を呈しつつあると指摘できる。すなわち、個人への牧地配分が少なかったことを主要因として、牧民はヒツジを売却し、ウシ飼養に「専門化」する傾向がみられる。さらに、中国都市部の牛肉消費量の急増も相まって、2000年代以降、仔ウシ売却を第一義とする「肉牛生産」に変わりつつある。牧地利用や牧畜形態の変化に着目した先行研究が指摘してきた通り、乳・肉の自給利用には制約がかかっていることは間違いない。しかし、同時に、牧民にとって乳・肉の重要性が必ずしも失われたわけではないことにも着目する必要がある。

本発表では、ウシ飼養に「専門化」した牧民に着目し、牧地の制約と仔ウシ売却を第一義とする牧畜生産の特徴をふまえ、搾乳の制限や肉利用として重要な位置付けをもつヒツジを手放したことによる影響を述べる。同時に、仔ウシの売却時期とは重ならないように搾乳の季節を夏から冬・春へと逆転させる工夫や、飼養しなくなったヒツジ肉の、祝いの場面などにおける入手方法や消費形態を考察する。以上の検討を通じて、国家政策により生業から産業へと牧畜の形態が大きく変わりつつある状況下でも、牧民が乳・肉を中心とした食生活に価値を置き、維持しようと工夫を施すことを示す。